

# 平和の構築のための日中教育者交流の課題と可能性

## －APCEIU 主催 GCED に関する日韓教員ネットワークに参加して－

矢野 淳一

伊豆の国市立大仁北小学校

### 1. はじめに

1973 年 10 月 9 日、創価大学の創立者池田大作先生（以下、創立者）は、第 5 回 NSA（現・Soka Gakkai International USA）学生部総会に向けて、「全人類の平和へ共戦の旗を掲げて」と題するメッセージを送った\*<sup>1</sup>。教育は一個の人間をつくりあげる重要な作業であり、生命の絶対尊厳を教えていくのが教育の使命であることを訴えたうえで、平和への精神的砦を人々の心に築く電源地として教育に関する国際的な連合組織である教育国連をつくることを提案している。その後、約半世紀間に渡り、教育国連、世界教育者サミット等の開催について幾多にも渡って提言してきた。これらの提言を概括すると、世界平和構築のために、政治や経済、軍事に左右されない教育の屹立と、教育に携わる人々による国際間の対話・交流・連帯を強調している。さらに、UNESCO（United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization:以下ユネスコ）の意義と役割を重視したうえで、それらが政府間組織とし抱える課題を踏まえ、民間の英知を結集した教育機関の設立について言及している。

筆者は、2021 年、アジア太平洋国際理解教育センター（The Asia-Pacific Centre of Education for International Understanding:以下 APCEIU）主催、日本国際理解教育学会・岡山大学が協力しての「第 1 回グローバル・シティズンシップ教育（Global Citizenship Education:以下 GCED）日韓教師交流ネットワーク」に参加した。当時、日韓関係は、国交正常化以降最悪と言われ、文化や教育交流も閉ざされている最中にあった。そのような中、「日韓の教師が開く平和の道」をテーマに教師同士の交流が行われ、さらにそこで知り合った韓国の教師と私のクラスで Web 会議や手紙交換等を通して 3 年間継続してクラス間交流を行ってきた。今後、ユネスコ機関と研究機関、教育機関が連携することにより、アジア各国の教育者の対話・交流・連帯がますます促進していくことが求められる。しかし、そこでは国の利益を越え、人類益の立場に立ち、新たな平和と教育の価値観を共に創り上げていくことが重要である。そこで、筆者は、これまでの創立者の教育提言における教育国連及び教育者サミット等の内容を時系列に整理した上で、目的及び方法について考察し、平和の構築のための日中教育者交流の課題と可能性について論及していく。

## 2. 教育国連構想の目的と方法とは

教育国連及び世界教育者サミット等に関する創立者のご提言を時系列に整理し、目的と方法を概観していくことで、教育国連構想について以下のように大要を把握することができる。

### (1) 平和推進のための教育国連

教育国連は、教育に関する国際的な連合組織であり、世界平和への精神的砦を人々の心に築く電源地として、国際間のあらゆる平和協力を築き、真実の世界平和を築くことを目的に、創立者が1973年10月9日に提案した平和教育機関である。生命の尊厳という人間共通の基盤に立脚して世界の各国、各地域において教育・文化社会をめざし、人種や民族、国家の枠を越えた人間連帯の平和の拠点である。教育国連は、政治的、経済的分野での国連等の国際機構の充実や国際協力が協力に推進されると同時に、人類益、地球益にたった教育を実現していくための潮流として構想を掲げている。教育国連での教育理念は、時勢や権勢に左右されるのではなく、人間に対する深い洞察と理解、そして愛情が根幹であり、人間の幸福のための教育を目指している。

### (2) ユネスコの課題と教育国連の役割

創立者による教育国連構想が提唱されたときの国際情勢は、東西冷戦の真ただ中であり、核兵器の開発競争が激化し、世界は緊迫状況にあった。アジア・アフリカでの植民地解放が進展するなか、東西問題に南北問題が絡み世界の対立構造は複雑化し、世界中で分断と対立が噴出していた。そのような状況下、ユネスコにおいても政治による主導権争いに利用され、崇高なユネスコの理念とは遙かにかけ離れた世界各国の政治状況を反映した期待や思惑の調整、妥協等に苦慮するところとなっていた。さらに、苦心して採択された教育勧告等が各国の教育政策に反映されなかったり、形式的な導入にとどまったり、教育現場に具体化として浸透されなかったりする等、問題が山積していた。

創立者は、ユネスコ憲章前文に掲げられている「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない。」という理念に賛同している。しかし、教育・科学・文化の分野における国際協力を通じて、国際平和と人類の福祉の促進を目的としたユネスコが政治利用のために歪められている状況を打開するために、教育が、その時々政治権力の干渉しえない、独自の主体性をもつ分野として位置づけられ、全人類の恒久平和を築くための生命尊厳に立脚した教育・文化を推進していく平和教育機

関をつくることを強く決意し提唱したのである。

教育国連は、教育現場に携わる教師、また家庭教育の責任者である父兄、さらには、教育を受ける立場にある生徒や学生、それに学識経験者等も加わり、できるだけ平等に近い立場で参加することが想定されている。そこには、実際に教育に関係している人たちの情報や意見、知恵が、教育改革の方向性に反映されるのみならず、現場における具体的な取り組みとしての広がり重視している。

創立者は、教育国連の前段階として、教育現場に携わる人たちの幅広い交流を兼ねた「世界教育者会議」や「世界教育者サミット」等の開催及び、世界の大学を結ぶ「世界大学総長会議」や学生の連合である「学生自治会会議」の開催等を提案している。つまり、様々な次元における教育組織が連携し、生命尊厳に立脚した教育の連帯が機能する平和教育機関が想定されていたと推測することができる。

### **(3) 生命尊厳の教育の広がりとしての教育国連構想**

創立者による教育国連構想とは、単に機関の設立や制度の改変について提唱したのではなく、本来在るべき教育の本義について洞察し、生命尊厳という人間共通の基盤に立脚した教育の重要性について一貫して提起し続けてきたことに着目することができる。

創立者が、最初に教育国連について提起したのは、先に述べたように創価大学で開催された学生部へのメッセージである。この冒頭では、全人類の平和のために 21 世紀を生命の世紀にしていくことを掲げている。生命の世紀とは、一切の思考の原点に、生命尊厳の哲理を置き、この生命哲理のうえから人間を内より変革し、人間の尊厳を、あらゆる分野にわたって具現化した世紀ということである。そして、教育は一個の人間をつくりあげる重要な作業であり生命の絶対尊厳を教えていくのも教育の使命であることを表明している。

創立者は、「社会の制度や仕組みは大切である。しかし、より重要なのは、それらを運用していく人間の心である。いかに制度が整っていても、人間のいかんによって、制度は悪用、形骸化されてしまう危険をはらんでいるからだ。」と書き綴っている\*<sup>2</sup>。大崎は、この創立者の指摘を受け、仮に理想的な制度が制定されたとしても、その運用によっては形骸化するおそれがあり、そのもとにおける運用が目的に即しているかどうかの判断基準は人間の在り方の問題であり、四権分立及び教育国連とは、永久・永続的な課題であると考察している\*<sup>3</sup>。つまり、教育国連構想は、生命尊厳の哲理に根差した教育の広がりそ

れ自体と解釈することができる。

#### (4)「教育のための社会」への提言の重点

創立者は、2000年9月29、30日、教育提言『「教育のための社会」目指して』において、「教育のための社会」への提唱している\*<sup>4</sup>。「教育のための社会」とは、国家や社会の繁栄のために個々人の教育がなされるのではなく、個々人の幸福のために、社会全体が教育について考え、携わっていくべきであるという考え方である。「社会のための教育」から「教育のための社会」へというダイナミックなパラダイムの転換は、創立者がコロンビア大学のロバート・サーマン博士との対談を通して得た着想であり、創立者の真意を的確に言い得た表現であることを付言している。小山内は、創立者による教育と社会の在り方に関する諸提言が包含され、ここで発表された教育提言で示された考え方が完成形であると考察している。\*<sup>5</sup>

この教育提言が発表された当時の時代背景は、不登校の増加、暴力行為、いじめ、薬物汚染、犯罪の低年齢化等の問題が山積し深刻となっていた。教育関係者をはじめ様々な努力にもかかわらず、事態は改善されないばかりか、それらの問題群が常態化していた。さらに新たな問題として学級崩壊、学びからの逃走傾向での学力低下、子どもの無力感、無関心やシニシズム（冷笑主義）の蔓延等によって教育の機能不全がいつそう深刻化していた。創立者は、これらの病理の背景には、学校に限らず地域や家庭など、社会総体が本来有しているはずの教育力の衰弱という根因が巣くっていることを指摘している。

創立者は、教育は、本来、学校現場だけでなく社会全体で担うべき使命であり、家庭、地域、そして政治、経済という社会全体の問題であり、責任であることに言及したうえで、社会全体の教育力を高めることを提案している。

創立者が「教育は、時勢や権勢に絶対に左右されてはなりません。私自身が体験してきた戦前日本の軍国主義教育の事例を挙げるまでもなく、誤った教育によって一番苦しむのは子どもたちであり、学生たちです。人間は手段ではなく、それ自身が目的である。人間の幸福を目指す教育もまた、社会のための手段ではなく、むしろ教育こそが社会の目的と考えるべきではないでしょうか。\*<sup>6</sup>」と述べているように、教育は人間生命の目的そのものであり、人格の完成つまり人間が人間らしくあるための第一義的要因であることが重要である。

さらに、ここで忘れてはならないのは、目的と手段を履き違えないことの重要性であ

る。創立者は、「一言でいえば、日本の場合、近代教育システムの歪みをもたらした最大の要因は、“富国強兵”や“殖産興業”といった国家社会の目標がまずあり、本来、人間の全人的成育、人格形成をめざすはずの教育が、そのための手段に貶められてしまった点にあります。目的であるはずのものが、手段になってしまっている。目先のことに一喜一憂するのではなく、この本末転倒をどう正すのかが、教育改革の根本に据えられなければならないと思うのです。<sup>\*5</sup>」と言明している。

そして、創立者は、この「教育のための社会」という大地に、生命尊厳の教育がしっかりと根を張ってこそ、初めて教育国連構想は芽吹くのであると先見している。

#### **(5)「生命のエートス」を基調とした教育交流**

生命尊厳の教育については、紙幅の関係上、概要の一端を紹介するのみでお許しいただきたい。生命尊厳とは、人間はもちろん、地球のあらゆる生命が、それぞれの個性を輝かせながら、平等に共生することである。創立者は、仏法の哲理を通し人間生命とそれを取り巻く環境とは、根本において一体不二であることを示している。そうした壮大な人間観、世界観のうえから、戦争や飢饉、疫病等の時代の乱れは、食欲、愚痴、瞋恚といった人間生命の濁りから生じており、その生命の濁りをどのように変革し、浄化し、価値創造のエネルギーへと転じていくかについて人間革命の法理を論じている。人間革命では、自己中心を脱却し、人間と人間、また人間と自然、さらには宇宙的次元の中で自己を捉えながら、人間が個性や多様性を失うことなく自身の生命を輝かし、さらに自他ともの生命を尊重し慈しむ「調和」と「共生」と「創造」の人格へと向上していくことを論じている。

創立者は、1999年、南開大学周恩来研究センターから受けた周恩来総理の精神と人格についての質問に、書面で5点に集約して回答を寄せているなかに「総理の言葉、行動には『共生のエートス』—即ち『対立よりも調和、分裂よりも結合、“われ”よりも“われわれ”を基調に、人間同士が、人間と自然とが、ともに生き、支え合いながら、ともどもに繁栄していこうという心的傾向』が脈打っており、その類いまれな具象化とってよいと思います。<sup>\*8</sup>」と、民衆への献身に生きた周総理の崇高な人生を真剣に学ぶべきであることを述べている。つまり、自分中心のエゴを基調とした生き方ではなく、相手を尊重し、讃え、協力し合うことを大切にする人格の育成が求められるのである。教育は、一つの次元で見れば、心を広げる作業であり、さらに、その人間同士の心の交流が幾重にも広がることによって、平和への道を開いていくのである。

表1 創立者の教育国連等に関する書籍・提言一覧

西暦	提言・書籍等	主なキーワード
1970	池田大作「わたくしの随想集」	四権分立の提唱
1970	池田大作「私の人生観」	教育の自主性
1970	池田大作/R・クーデンホフ＝カレルギー「文明・西と東」	四権分立
1973	第5回NSA（現・アメリカSGI）学生部総会メッセージ 「全人類の平和へ共戦の旗を掲げて」（創価大学中央体育館） 1973年10月9日	教育国連 四権分立
1974	創価大学第4回入学式講演「創造的生命の開花を」 （創価大学中央体育館）1974年4月18日	教育国連 世界大学総長会議
1975	日本協会主催レセプション「平等互惠の地球社会を」 （ニューヨーク・ジャパン・ハウス）1975年1月10日	教育国連
1975	池田大作/アーノルド・J・トインビー「二十一世紀への対話」上巻	教育の尊厳
1975	池田大作/松下幸之助「人生問答」下巻	四権分立・教育国連
1977	池田大作/井上靖「四季の雁書」	教育権の独立
1984	池田大作/アウレリオ・ペッチェイ「二十一世紀への警鐘」	科学を正しく使いこなしていける人間
1984	「教育の目指すべき道ー私の所感」1984年8月25日	世界教育者会議・教育国連
1987	第12回「SGIの日」記念提言『「民衆の世紀」へ平和の光彩」 （聖教新聞）1987年1月26日付掲載	教育国連
1987	池田大作/ヘンリー・キッシンジャー『「平和」と「人生」と「哲学」を語る』	教育国連
1989	池田大作/J・デルボラフ「二十一世紀への人間と哲学（下）」	四権分立
1995	池田大作/アウストレジエジロ・デ・アタイデ「二十一世紀の人権を語る」	教育国連 世界人権宣言
1996	コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジでの講演『「地球市民」 教育への一考察」1996（平成8）年6月13日	世界教育者サミット 教育権の独立
2000	池田大作/ルネ・シマー/ギー・ブルジョ「健康と人生ー生老病死を語る」	四権分立
2000	教育提言『「教育のための社会」目指して（聖教新聞） 2000年9月29日、30日付掲載	教育のための社会 教育国連・世界教育者サミット
2001	教育提言「教育力の復権へ 内なる『精神性』の輝きを」 （聖教新聞）2001年1月9日付掲載	教育のための社会
2001	池田大作/デイビッド・クリーガー「希望の選択」	教育権の独立
2002	池田大作/ヴィクトル・A・サドーヴニチ「新しき人類を 新しき世界をー教育と社会を語る」	教育のための社会
2004	池田大作/ヴィクトル・A・サドーヴニチ「学は光ー文明と教育の未来を語る」	教育のための社会 四権分立
2005	池田大作/趙文富「人間と文化の虹の架け橋ー韓日の万代友好のために」	教育のための社会
2005	池田大作/R・D・ホフライツネル「見つめあう西と東ー人間革命と地球革命」	教育のための社会
2006	池田大作/ロナルド・ボスコ/ジョエル・マイアソン「美しき生命 地球と生きるー哲人ソローとエマソンを語る」	四権分立
2007	池田大作/ドジョーギーン・ツェデブ「友情の大草原ーモンゴルと日本の語らい」	教育のための社会
2009	池田大作/饒宗頤/孫立川「文化と芸術の旅路」	教育のための社会
2009	池田大作/ハンス・ヘニングセン「明日をつくる“教育の聖業”ーデンマークと日本 友情の語らい」	教育のための社会 四権分立・世界教育者サミット
2010	池田大作/張鏡湖「教育と文化の王道」	四権分立・教育国連
2010	池田大作/章開沅「人間勝利の春秋ー歴史と人生と教育を語る」	教育のための社会
2011	池田大作/ミハイル・ズグロフスキー「平和の朝へ 教育の大光ーウクライナと日本の友情」	四権分立・教育国連
2012	池田大作/顧明遠「平和の架け橋ー人間教育を語る」	教育のための社会
2013	池田大作/ヴィクトル・A・サドーヴニチ「明日の世界 教育の使命ー二十一世紀の人間を考察する」	教育権の独立
2016	池田大作/バラティ・ムカジー「新たな地球文明の歌をータゴールと世界市民を語る」	教育のための社会 教育権の独立

### 3. APCEIU の GCED 日韓教員交流ネットワーク

先に述べたように筆者は、2021 年、「第 1 回 GCED 日韓教師交流ネットワーク（以後、日韓教師交流）」に参加した。ユネスコによる GCED の定義は、「教育が世界をより平和的、包括的で安全な、持続可能なものにするために必要な知識、スキル、価値、態度を育成するための理論的枠組み」であり、その目標は、「学習者が国際的な諸問題に対峙し、その解決に向けて地域レベル及び国際レベルで積極的な役割を担うことで、平和的で、寛容な、包括的、安全で持続可能な世界の構築に率先して貢献することを目指す」ことである。

APCEIU は、2000 年、UNESCO と大韓民国政府の間で締結されて設立されたユネスコの カテゴリー 2 センターであり、国際理解教育（Education for International Understanding:以下 EIU）と平和の文化（a culture of peace）を通して GCED の推進を目的としている。コロナ禍に開催された第 1 回の日韓教師交流では、日韓の小中高の教員を各 15 名程招聘し、全ての研修がオンラインで行われた。プログラムの内容は、GCED と SDGs に関する研修及び講演、学校現場や NPO 関係者による GCED の実践紹介、日韓教師による共同での授業計画、教育実践、事後の振り返り等が行われた。

日韓教師交流では、教師同士の様々な意見交流が行われた。当時、日韓の政治状況が悪化して中、従軍慰安婦問題等の歴史認識、ヘイトスピーチの問題、福島第一原子力発電所による ALPS 処理水の海洋放出等の話題にも及んだ。概して、教育交流は国と国との交流の一種であり、両国の政治関係がよければ、教育と文化の交流も良好に行われ、政治関係が悪化している状況では、教育交流に悪い影響を与えていく。しかし、日韓教師交流では、互いに平和の文化に向けた GCED の教育理念や教育実践の推進が目的であるため、複雑な国際問題の話題から、それらの問題をどのように教育を通して解決していったらよいか、さらに、SDGs の実現に向けた教育実践の具体化について話題が転換されていった。このように教育が政治の影響から脱却し、人種や民族、国を越えて全世界の平和と貢献のために果たしていく使命は大きく、そのネットワークを広げていくことが希求されるのである。尚、筆者自身の日韓教師交流での教育実践については、「お互いを知り、自然や文化を伝え合う交流学習<sup>\*9</sup>」をご参照いただきたい。

### 4. 日中教育者交流の課題と可能性

中華人民共和国には、ユネスコの東アジア地域の教育、科学、コミュニケーション、

文化を管轄する東アジア地域事務所が北京市にあり、今後、上海に科学（Science）・技術（Technology）・工学（Engineering）・数学（Mathematics）に関する（以下 STEM）ユネスコのカテゴリー1 センターが設立されることが第 216 回ユネスコ執行委員会の決議で採択されている。これらのユネスコ機関と、大学等の研究機関、NGO（Non-governmental Organization）による民間組織等が連携することにより、アジア各国の教育者の対話・交流・連帯が促進していくことが求められる。

社会の繁栄には、STEM に関する教育は必要不可欠である。しかし、これからの時代で最も重要なのは、STEM を人間の幸福と平和の文化の創出のために正しく使いこなしていける人間を育成していく生命の尊厳に立脚した教育であり、「社会のための教育」から「教育のための社会」へのパラダイムの転換である。今後、中華人民共和国と日本のさらなる盤石な友好を築くために民衆レベルの日中教育者交流の広がりが希求される。そこでは、各国の利益を超え、人類益の立場に立ち、新たな平和と教育の概念と価値観を国際間で共に創り上げていくことで、教育を通して友好を確かなものとし、真実の世界平和実現に寄与するのである。

## 5. おわりに

創立者は、あらゆる学問も、政治も、経済も、教育も、芸術も、その志向するところは、人間の幸福であり、社会の平和と繁栄であることを言明している。さらに、環境問題や戦争、差別や貧困等々、人類のかかえる諸問題の根本的な解決のためには、人間自身の変革が求められることを明示している。創立者の生命尊厳に立脚した教育思想は、仏法を根幹にあらゆる思想、哲学に精通したものであり、さらに、世界の偉大な指導者、各界の識者、様々な知性、多くの民衆との対話を通し価値創造を重ねてきた広大かつ深淵な思想、哲学である。このたびの論考は、教育のための社会及び教育国連構想等について、現場の教師の一視点から論じたものであり、これらの構造化のためには今後のさらなる研究が必要であることは言うまでもない。筆者は未だ研究途上で力不足を自覚している次第であるが、今後の議論の一助となることを期して研究試論の執筆に至ったことを申し上げ、本稿の結びとする。



## 【引用文献】

- \*<sup>1</sup> 池田大作,「池田会長講演集」第6巻,東京,聖教新聞社,1976,213-218p.
- \*<sup>2</sup> 池田大作,「新・人間革命」第26巻,東京,聖教新聞社,2014,212p.
- \*<sup>3</sup> 大崎素史,「四権分立の研究－教育権の独立－」,東京,第三文明社,2014,25p.
- \*<sup>4</sup> 池田大作,「池田大作全集」第101巻,東京,聖教新聞社,326-338p.
- \*<sup>5</sup> 小山内優編,「『教育のための社会』へー池田大作教育思想の研究ー」,東京,第三文明社,2023,34p
- \*<sup>6</sup> 池田大作/顧明遠,「平和の架け橋－人間教育を語る－」,東京,東洋哲学研究所,2012,292-293p.
- \*<sup>7</sup> 池田大作/ヴィクトル・A・サドーヴニチイ,「学は光」,東京,潮出版社,2004,37-38p.
- \*<sup>8</sup> 南開大学周恩来研究センター,「周恩来と池田大作」東京,朝日ソノラマ,2002,134p.
- \*<sup>9</sup> 矢野淳一,お互いを知り、自然や文化を伝え合う交流学习,メディア情報リテラシー研究第5巻第1号,東京,法政大学図書館司書課程,2024,49-59p.

## 【参考文献】

- 池田大作「わたくしの随想集」,東京,読売新聞社,1970
- 池田大作「私の人生観」,東京,文藝春秋,1970
- 池田大作/R・クーデンホフ＝カレルギー「文明・西と東」,東京,サンケイ新聞社出版局,1970
- 池田大作「池田会長講演集」第6巻,東京,聖教新聞社,1976
- 池田大作「池田大作全集」第59巻,東京,聖教新聞社,1996
- 池田大作「新版池田会長全集第1巻,東京,聖教新聞社,1977
- 池田大作/松下幸之助「人生問答」下巻,東京,潮出版社,1975
- 池田大作/アーノルド・J・トインビー「二十一世紀への対話」上巻,東京,文藝春秋,1975
- 池田大作/井上靖「四季の雁書」,東京,潮出版社,1977
- 池田大作/アウレリオ・ペッチェイ「二十一世紀への警鐘」,東京,読売新聞社,1984
- 池田大作「教育の目指すべき道-池田名誉会長の教育への指針」,東京,聖教新聞社,1985
- 池田大作/ヘンリー・キッシンジャー『「平和」と「人生」と「哲学」を語る』,東京,潮出版社,1987
- 池田大作/アウストレジエジロ・デ・アタイデ「二十一世紀の人権を語る」,東京,潮出版社,1995

池田大作「池田大作全集」第101巻,東京,聖教新聞社,2011

池田大作/J・デルボラフ「二十一世紀への人間と哲学（下）」,河出書房新社,東京,1989

池田大作/ルネ・シマー/ギー・ブルジョ「健康と人生－生老病死を語る」,東京,潮出版社,2000

池田大作/デイビッド・クリーガー「希望の選択」,東京,河出書房新社,2001

池田大作/ヴィクトル・A・サドーヴニチ「新しき人類を 新しき世界を－教育と社会を語る」,東京,潮出版社,2002

池田大作/ヴィクトル・A・サドーヴニチ「学は光－文明と教育の未来を語る」,東京,潮出版社,2004

池田大作/趙文富「人間と文化の虹の架け橋－韓日の万代友好のために」,東京,徳間書房,2005

池田大作/R・D・ホフライトネル「見つめあう西と東－人間革命と地球革命」,東京,第三文明社,2005

池田大作/ロナルド・ボスコ/ジョエル・マイアソン「美しき生命 地球と生きる－哲人ソローとエマソンを語る」,東京,毎日新聞社,2006

池田大作/ドジョーギーン・ツェデブ「友情の大草原－モンゴルと日本の語らい」,東京,潮出版社,2007

池田大作/饒宗頤/孫立川「文化と芸術の旅路」,東京,潮出版社,2009

池田大作/ハンス・ヘニングセン「明日をつくる“教育の聖業”－デンマークと日本 友情の語らい」,東京,潮出版社,2009

池田大作/張鏡湖「教育と文化の王道」,東京,第三文明社,2010

池田大作/章開沅「人間勝利の春秋－歴史と人生と教育を語る」,東京,第三文明社,2010

池田大作/ミハイル・ズグロフスキー「平和の朝へ 教育の大光－ウクライナと日本の友情」,東京,第三文明社,2011

池田大作/顧明遠「平和の架け橋－人間教育を語る」,東京,東洋哲学研究所,2012

池田大作/ヴィクトル・A・サドーヴニチ「明日の世界 教育の使命－二十一世紀の人間を考察する」,東京,潮出版社,2013

池田大作/バラティ・ムカジー「新たな地球文明の歌を－タゴールと世界市民を語る」,東京,第三文明社,2016

池田大作「中国の人間革命」東京,毎日新聞社,1974